

「津波」その時、何をすべきか

—過去の教訓から学ぶ 津波に対する心得—

四方を海に囲まれた日本は、古来から繰り返し大きな津波災害に襲われ、昨年発生した東日本大震災でも、津波によって多くの方が犠牲になりました。「tsunami（ツナミ）」は国際語としても通用します。これは、日本で津波が数多く発生していることを物語っています。津波から身を守るため、その時、私たちは何をすべきか考えてみましょう。



▲昨年3月に発生した東日本大震災で津波の被害を受けた宮城県名取市。津波によってほとんどの家が浸水。倒壊や流失した家々も(写真提供:愛知県)

渥美半島の津波被害

安政東海地震(1854)

太平洋岸一帯に2〜10mの津波が襲来。家屋の流出、漁船・漁具が多数流失した。

チリ地震(1960)

地震発生から20時間以上経過してから津波が襲来。旧渥美町地域で一部の家屋が浸水した。

東日本大震災(2011)

赤羽根漁港で155隻の津波を観測。漁船2隻が浸水し廃船となった。



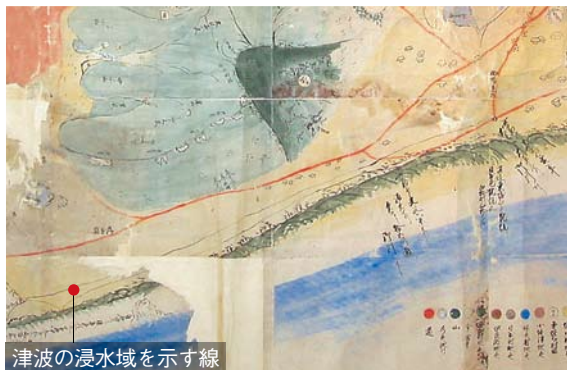
▲被害のあった漁船

※東三河地域では数多くの津波が発生しています。詳しくは、今年7月に各世帯に配布した「東三河津波歴史パンフレット」または市ホームページをご覧ください。

<http://www.city.tahara.aichi.jp/>

江戸末期の防災体制に学ぶ

江戸末期(1854)に起きた安政東海地震(安政大地震)。その時、西堀



▲安政東海地震による津波の浸水域を描いた西堀切村絵図を一部拡大(渥美郷土資料館蔵)

切村(現堀切町)が受けた津波による被害状況が古文書に残されています。当時の西堀切村は現在の国道42号周辺にあったと推測され、村内233戸のうち半数近くが津波で流され、村は壊滅状態となりました。これほどの被害にもかかわらず、村人約1000人の中で犠牲となったのは8人でした。これは沖合の魚の群れを観察していた漁民が、潮が急激に引くのを発見し、すぐに集落へ津波の襲来を知らせ、多くの人が逃げることでできたからだといわれています。おそらく、この時代から「津波にすぐに逃げる」という習慣が村人たちの中で言い継がれてきていたのだと考えられます。